「望まれる防災の灯台」（協同組合通信/山椒弾」　2004.11.16

今年は日本の気象史に残る天災が続いている。上陸台風 10 個はいずれも大災害をもたらし、台風 23 号の傷跡は今なお深く重たい。

10 月 23 日、週末の夕食時に震度 7 の猛烈な地震が発生。新潟県中越地方などで、依然として、余震が続き、被災者の心も身体も休まらない。阪神大震災級の強さに、改めて、日本列島が脆弱な地盤と火山帯の上にあるという事実に慄く。

地震を予知できない以上、発生前になすべきことは限られる。国の対策も耐震化へと大転換した。行政や防災関係者はその施策を真剣にかつ一刻も速く、該当家屋の持ち主へ周知徹底させる取組みが望まれる。

船乗りであった頃の話。操業効果を重視した 100 トン前後の巻き網漁船は、台風に対抗できる設計ではなかった。弱点を熟知した漁労長は細心の注意で、最新の台風情報収集に神経を使っていた。例え、操業中でも台風接近の報に接すると、乗組員一同へ大音を発し、直ちに網を巻き上げさせた。稼ぎの玉を捨て去るのだ。近くの広い湾がある港への距離と船足を計算し、エンジン全開フルスピードで港へまっしぐら。

岬の灯台が見えてきた時が意外にも危険が一杯。台風で、うねりと波の方向は一致せず、三角波が船体のあらゆる方向から怒涛のようにぶち当たる。港口付近は水深が浅いので、さらに波が砕け、舵取りの一瞬の不注意で、座礁か転覆の危機。

史上最強の台風による暴風や土砂災害、新潟県中越地震の農業被害で激甚災害特別法が適用されている。6 月以降の相次ぐ台風襲来に対して、防災対策の灯台がないと思う。こうすれば安心・安全だという道標がないために、絶えず底知れない不安が押し寄せ、被災者のやり場のない憤りが募るだけ。そこに佇むだけの灯台だが、その存在感と灯火・閃光は、今も変わらず船乗りの守護神。

今年の自然災害の頻発は気象の常識を超えているが、今こそ、全知全能を使って、最善な防災活動の灯台作りが必要だ。防災情報「地震番」の携帯電話サービスを、多くのユーザが利用している。気象情報を越えた、一歩前進の防災の灯台の構築を準備している。

（　気象情報システム株式会社　高　津　敏　）